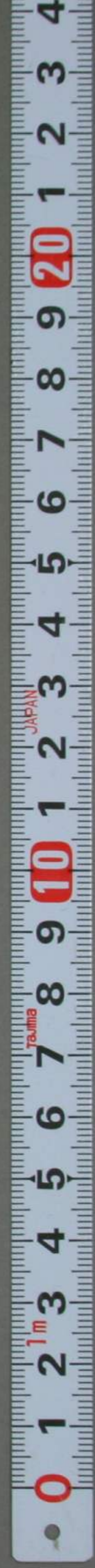


土屋 正義 編輯

孫中山書記

四

遠世
2269
4



八遠 14
2269
4

鏡山

繪本石山軍記初篇卷之四

目録

浅井佐和山は織田殿と饗應也

并木下が智遠藤が害心を察也

明智光秀初て信長を謁也

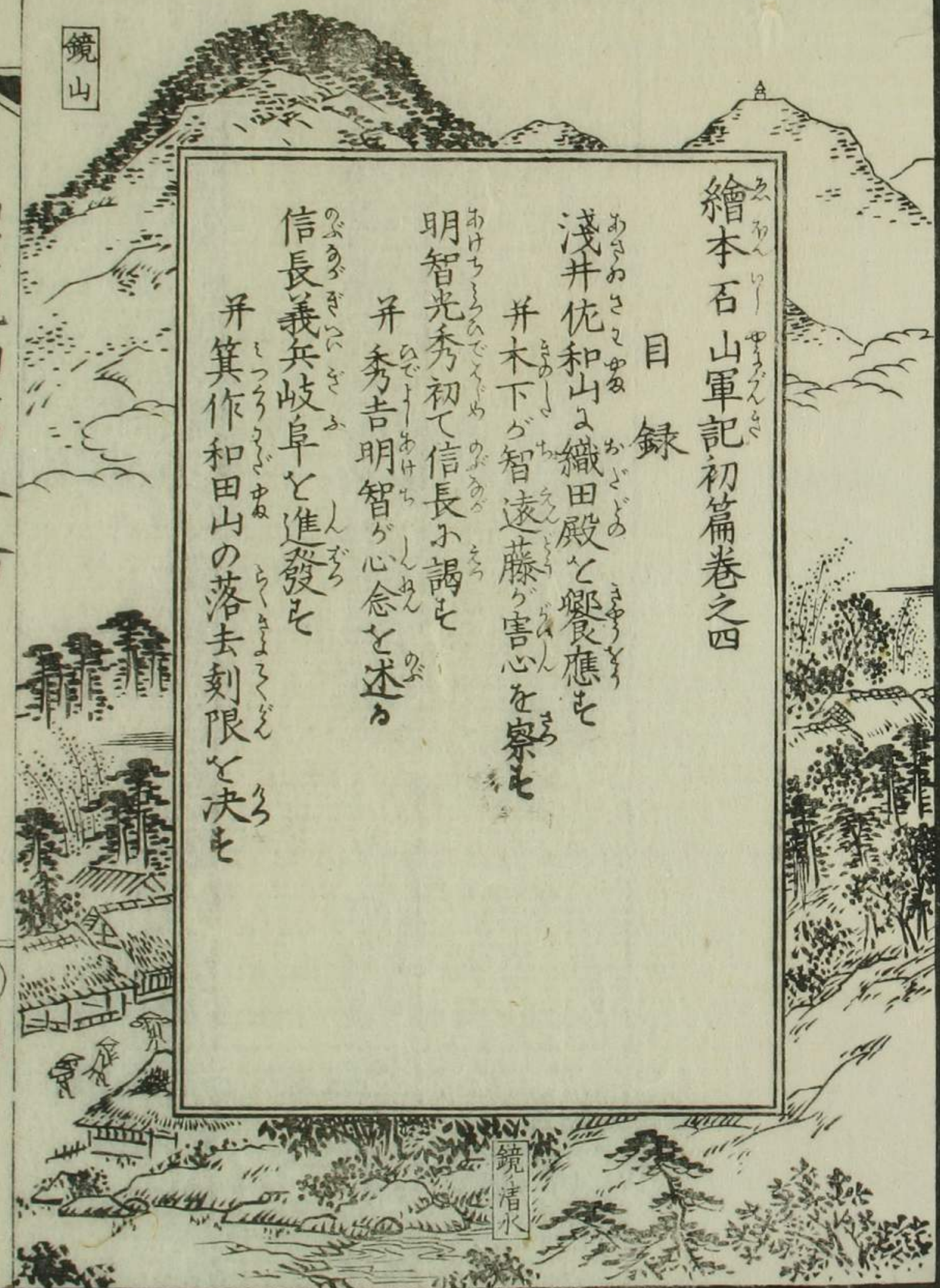
并秀吉明智が心念を述也

信長義兵岐阜と進發也

并箕作和田山の落去刻限を決也

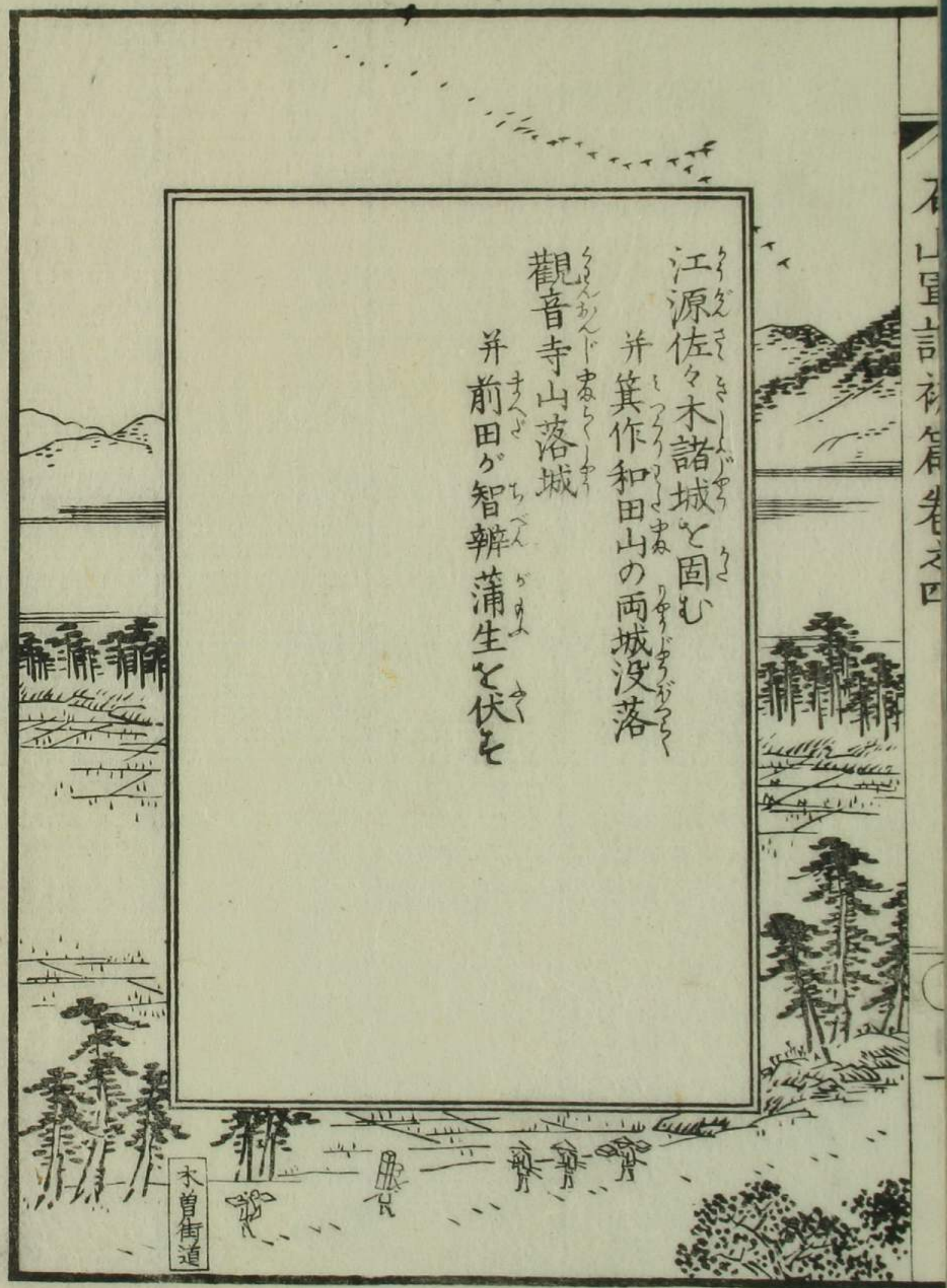
石山軍記初篇卷之四

目一



鏡清水

江源佐々木諸城と固む
 并箕作和田山の両城没落
 観音寺山落城
 并前田が智辨蒲生と伏む



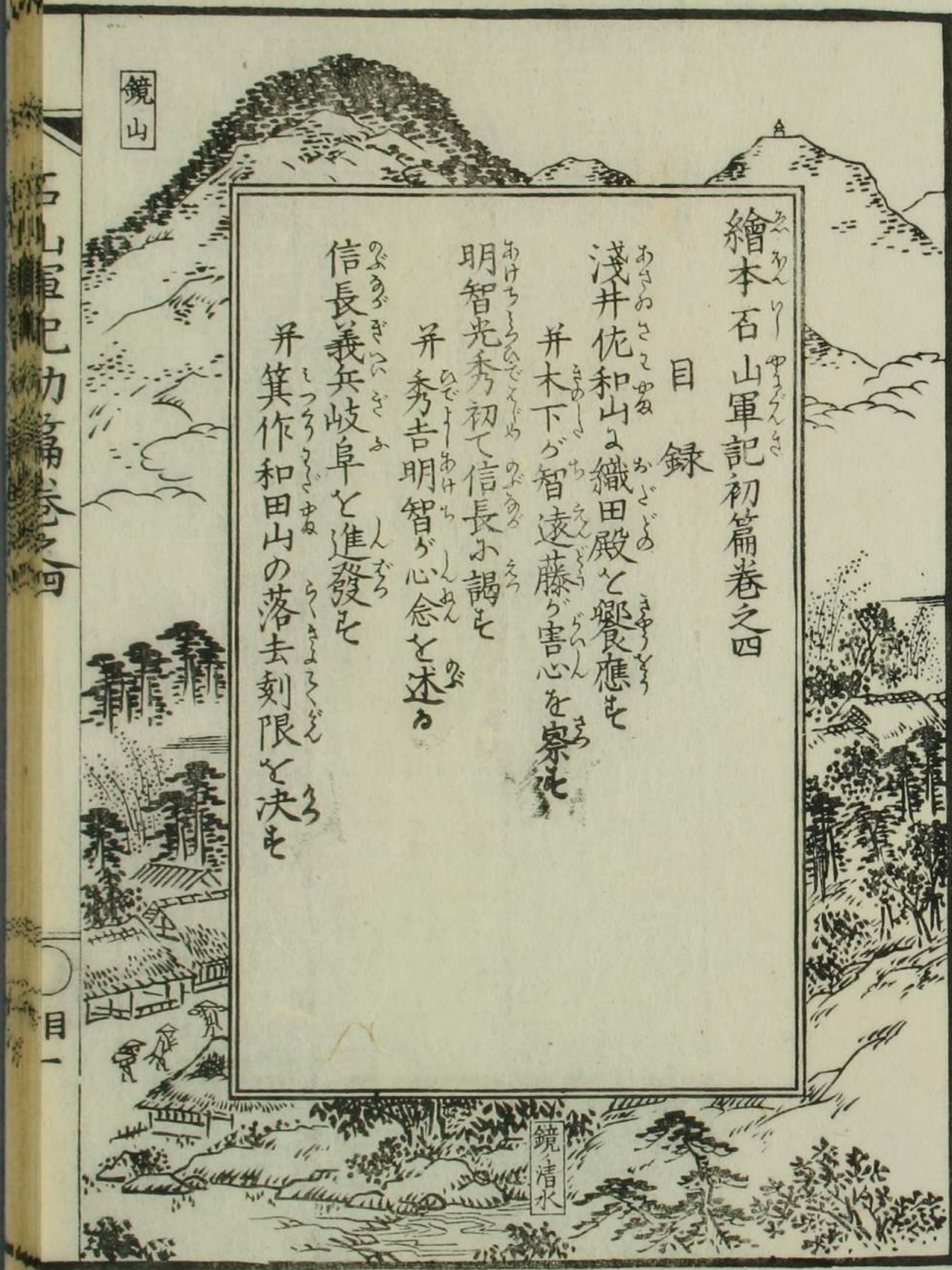
木曾街道

繪本石山軍記初篇卷之四

目録

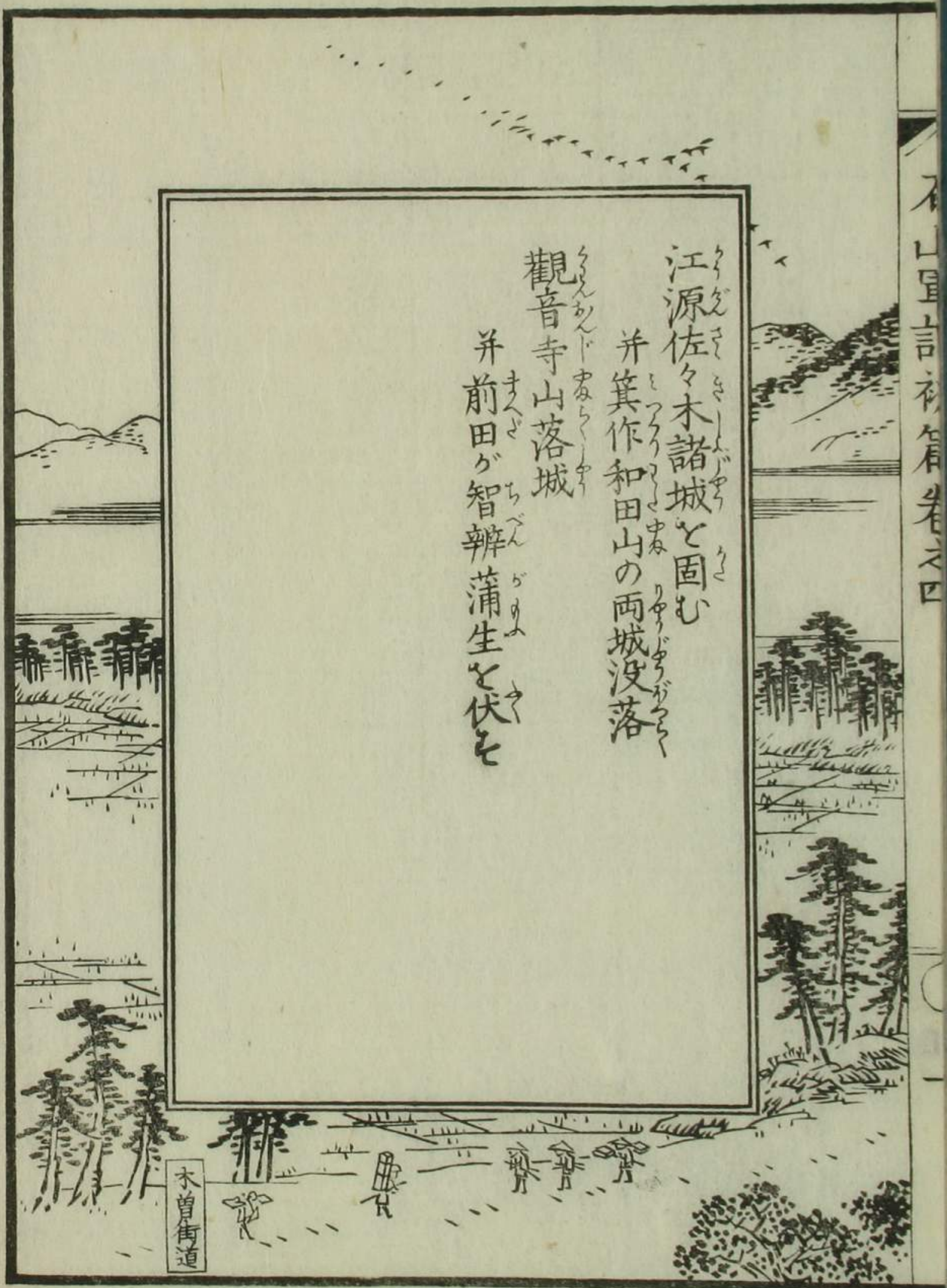
浅井佐和山と織田殿と饗應を
 并木下が智遠藤が害心を察む
 明智光秀初て信長を謁む
 并秀吉明智が心念を述べ
 信長義兵岐阜と進發を
 并箕作和田山の落去刻限を決む

鏡山



鏡清水

江源佐々木諸城と固む
并箕作和田山の両城没落
観音寺山落城
并前田が智辨蒲生と伏と



木曾街道

繪本石山軍記初篇卷之四

土屋正義 編輯



浅井佐和山小織田殿と郷餐應と并木下が智遠藤が害心と察と

永禄十一年八月七日の黄昏織田信長江州佐和山の城小入客殿小於て
浅井家の意厚と郷餐應の席に臨み頓て長政に對し公方家御上洛
の萬端と議せし江南の佐々木美禎が心底先小義昭朝臣と謀り
一條和田長岡の物語と粗知ども是の表立ざる謀反して未だ發
覺せざりてあるまじき今日改め使者と遣うし其返答小依て尚評
定に及ぶへし酒宴と催すは浅井の長臣と悉く召出さし信長を
くふ詞とくちと盃と賜りたる其中小當家の忠臣より遠藤喜右

衛門とらへる者有て進み出づ膝行し信長の相形骨法と伺ひ詞の端々
と考へ何れも名譽の良將とて此人あり。然まども其言語小聊不審
あり。非ぞ原来當家と縁組つて事極意の謀略の種と思ふ。斯く
あり長く好むと結ぶべき志にあり。斯く敷あり。未だ其を
僥倖あり。速し信長と討て義昭朝臣と當国小迎へ當家の力を
以て三好松永と滅し將軍家と再興し奉らん。末代の名譽
規摹たぐべし。と暴小謀と沈吟し郷食應の調味小燻毒と用ひんと
思ひ。長政小知とて。悪くべし。と長政が座と立を待
たり。長政さうに座と立とあり。喜右衛門暗小小谷へ馳
り。長政の父久政小此謀と示し合す。久政あまを兼引せ。信

長平服あり。些ぐも用心の体なく。來臨あり。兄弟婚姻の好と思
ふ。故なり。其と情なく。毒殺せん。人の道あり。や殺し得
たり。信長の勇猛小恐。欺き。毒と銅。と言まん。淺井が弓
箭の耻辱と。努め。此度おのひ止。と。嚴くも制せ。喜
右衛門も力あり。佐和山へ立。熟思あり。此度信長と討。後日小
必。悔あり。たと。主君の免。是と仕。淺井家を
爲。一圖。おのひ定め。遠上。信長小近。と。透。見。刺殺さ
んと。短刀と懷。今や。近寄んと。窺。故。推参。様も
あり。數心と痛。不圖。小立。小性。長柄と見て。是。究竟と
小性。御酌仕。座席小進。木下藤吉郎。遠藤が

遠藤密謀と
告んと小谷ふ
飄る

淺井家の
長臣信長と
殺さんと佐
和山と鞍
馬小鞭と
て小谷と



飄ゆと久
政小密謀と
謀む其行程
佐和山と米原
箕浦名越管
江石田上坂を
經く小谷と
つる凡四里と
往還八里時の
酉の刻より亥の
刻の間あり



遠藤喜左門

顔色小殺氣頭顔色小殺氣頭と怪し怪し酒を飲酒を飲む萬端萬端は氣をつけ氣をつけ八方遠近小
 眼眼と配り毛頭毛頭も油斷油斷ありありが只今遠藤が長柄長柄と以以て酌小立酌小立る形
 勢何勢何となく尋常尋常ありあり後藤吉郎後藤吉郎つと座座と立て遠藤が向向へ廻廻り足下足下の
 老体老体といい身柄身柄と申申し小性小性ががううり酌酌るる勤勤めめららままんん事事長長氣氣ありあり銚子
 此方此方へ賜賜り候候へ某某丁丁を年若年若ううと相相應應の役役小候小候とと言言ひひ遠
 藤藤が持持たる長柄長柄とと非非ずずも取取んんととななるると遠藤遠藤ありありて愚臣愚臣
 久政久政より御御りててるるの役役と命命ぜぜるる罷出罷出候候へへももささせるせる義義ももなく
 てありあり御御酌酌ありありも仕仕り候候ありあり一献一献と進進め奉奉ららんと存存じじ態態と
 罷立罷立候候必必ず御御斟酌斟酌ありありと足下足下の殿殿の御近習御近習ありありと
 所謂御客人所謂御客人なり唯愚臣唯愚臣小任小任せ給給へへといい藤吉郎藤吉郎ううらら笑笑ひひ御

酌小立酌小立の美女美女り少年少年り麗麗くくと人の役人の役ありありと荒男荒男よりより似合似合
 しくしく却却て興興ももささめめるるべべ某御酌某御酌仕仕んと取取ららんとああををと遠
 藤渡藤渡は長政長政ととに御縁組御縁組ありあり上上の愚臣愚臣が為為も主君主君なり
 臣臣が献酌献酌仕仕るるも聊御奉公聊御奉公候候ふふとと雙方斟雙方斟んん斟斟と争争ふふと
 信長信長の兩人兩人が心心と識識りりああををと制制しし論論ひひを希希くく喜右衛門喜右衛門が
 厚志厚志の酌酌と受受べべ是是小就小就て思思ひ出ひ出せせ物語物語ありあり昔昔兵兵国
 の王王は僚僚ととるる人人ありあり生質生質強強悪悪ううて常常小暴戾小暴戾ありありがが姫光
 ととりり人人則則ち従従弟弟ありありが密密に僚王僚王を亡亡しし国国と奪奪ふふと計計りり僚
 王王が平生平生呉江呉江の魚魚の炙炙りりののを好好めめると以以てて一時一時鱸鱸ののああづづりり肉肉を
 酒酒と奉奉ふふと言言ひひてて僚王僚王と請請待待を僚王僚王も又用心又用心酒を

酌肴とそふ者と雖も若くは懐中小劍とくく己と刺んとそふ
計畧も有んりと其懐中と改め別条ある者へ近づく。姫光はさふ
鱸魚の腹中小長七寸許の名劍と藏し。鱒諸とくる豪傑と膳宰
の容小出扮せ盤と捧げく近付し。此者原来武勇人よ超え勢ひ
尋常あり。僚王らと見咎め此へ何者といふ。姫光答へく是膳宰
なり魚の炙物といふも。膳宰の手よ割せざれば其味美あらず。是小因
て此小出とく僚王ら其懐中と探らし。一寸の刃物もあ
爰に於て近づく。鱒諸魚の肉と割射し。忽ちかくせし
名劍と取出し。終に僚王と殺害せり。世小慎びては刺客の難なり。
予是を聞し。後他国の臣たる人と酒宴ふ近づく。やど少童侍

女にあつぎまゝ座前を免る。然るも我嘗て當家と疑ふ。壯士給
仕し侍るといふも嫌ふ。今藤吉郎が拒むりの喜右衛門が武勇
人小超とくを以て自然鱒諸が刺客よ儆ん軟と疑ふ。故ちあべし。
己小悪るも。奸悪あるの上へ人小陥まらう。異心あり。覺へど有
るまゝ。遠藤ハユの星とくま進む。るる爲体小長政感せ。面色
よく實御物語と兼て吾亦近頃徳と得り。亭主小遠慮ある。さし
遠藤が鹿忽の行状つ。重くも許し。何れも何小まき。御容小逆ふを
無禮小く。御酌ハ木下よ讓る。と遠藤と制めらう。に喜右衛門ハ
心中よ十が九仕課せ。小残念至極と思ひ。苦笑ひて元の座
に之。織田の君臣油断あり。感嘆せり。斯く木下酌とくり程

席と取繕ひ數酒宴小興と増し、兩將より打解て最睦まどく見へる所へ、佐々木兼禎の許へ使者小至り、和田伊賀守立ちつらりと聞ゆる、藤吉郎の心中小只管よろこび、鉾子とらと小性小譲り元の座席小立返る、此時藤吉郎あり、せむ遠藤が爲小不測の災あり、あつて危ふらと、宴席あり、儲新公方家の御使と、和田伊賀守箕作の城又行向り、所兼禎より兼伏せむ御使も敬と、法外無礼のり、故その儘まゝ歸ると告る、信長嘲らし、此上い再び言と費と、くぐん我兩家の旗と以て切摩らん、霜雪の日小向ゆるも脆らん、あん九月上旬小師起と、間長政より此地小有と出陣の日と待、此節あまば隨分忠功と立給へと約定

あり、此上濃州へ立ち、其用意とあま、暇乞し、佐和山と立ち、長政の御送、ふと打立路次の警固とて、始り小甚嚴小守護せ、め摺針より長政の別と告、引く、信長と柏原の成菩提院と、以て旅館と、な、あ、長政より、の御馳走、浅井縫殿助中、寫九郎次郎、遠藤喜右衛門、ホ三人と付置、然る小信長、い、あ、快く寛、給、我、誓、の、領地、あ、ま、我、國、も、同、と、聊、用心の体も、あ、御酒宴の後、熟醉、あ、み、と、見、て、遠、藤、喜、右、衛、門、佐、和、山、と、く、本、望、と、遂、が、こ、此、所、を、天、の、苑、あ、る、時、と、云、べ、い、今、夜、中、の、道、と、心、と、決、一、唯、一、駿、馬、小、鞭、と、あ、ま、再、び、小、谷、へ、馳、行、を、

遠藤主君小密計と勸む并旅館の敬言衛春基と驚ましむ

遠藤喜右衛門春基とらむと ちむろき只一騎小谷の城いちりゆう せうたにの しろ馳は之を久政長政ひさまさ ながまさ小申せうまをの
 何なにふままは信長のぶなが表裏反覆へうり せんやう ころりやうの大將たいしやうとらぶし抑今般新公方家御
 上洛じやうらくの師起ししきの所謂しゆわい天下てんかの大事だいじなりと我わが家けの壻むことし殊更しゆげう織田家おだけの大
 身みなりと自国じこくへ呼よびよせ軍議ぐんぎともあり又攻口またせめぐちとも分附ぶんぷせらるべ未いまど
 此方こなたより壻入むこりりともしめらるべ我國わがくにへ自みづから来きり言ことと巧たくまして欺あざむく事こと
 奸計けんけい腸はらふべ謀畧成就ぼりやく じゆうじゆの期きまぐいと弋とらふべ鷹たかともありて當家とうけ
 と遣つひ天下てんか掌握しやうぎのく罪つみとし少すくく忍しのんで事ことと計はかり今いまも
 天下てんかを得えるべどあらば今日こんにちといふ同おなドくどぞ争いうべ長ながく好このむと結むすむ
 事こと覺あがつる且また信長のぶながの心こころ小始こし終違しゆうちがひぬ様やう何なにとてあらせられしめし
 未いまも遂ついにぬ事ことに暇いとまくせ給たまふ事こと謀はかるべ小似こにたり又對またむかひくの軍

信長のぶなが小勝事せうしやうじ今夜拍原けふや ぱくげんとし心こころとゆらし打解うちげて
 熟醉じゆくさいせらるべ所ところへ侍六七十人しやくしちじゆしにんぐら喜右衛門次身きえもんじみと仰付おほせらるべし首
 尾おしく信長のぶながと討取申うちとれまをんづく候まを供たての者ものへ町家ちやうけ小止宿せうしゆくとら候まをへは
 是こゝと討うちいと安やすくらべし其勢そのせいと拔ひぶ濃州のうしゆへ乱入らんにやう一ひと岐阜きふと追落おひお
 新公方家しんこうほうけと此方こなたへ迎むかへ奉ほうと高鳥郡たかとりぐんと都みやこへ切上きりあり三好一家さんこういけと責破せめり天
 下したに旗色はたいろと靡なるべ候まをべし是天てんの與よつる幸さいひなり早く御同心ごどうしんありて然
 べしと勸すすめらるべ久政長政ひさまさ ながまさ以外いげ小驚こおどろきこ思おもひも寄よびら
 奇愛きあいるべ信長のぶなが猿猴えんこうが梢せうと傳つたふらるべ良將安閑りやうしやうあんかんとし体たい小持せうぢありら
 共何条備ともなんじやうびの無なき哉や危あや忽とふ計はかつく討損うちとど却かつく禍わざはひと招まぐべ謀はからるべし
 若亦用心わかまたしんありら尚更なほさら小情こじやうありら飼鳥かひとりと殺ころすべく熟睡じゆくさいの人ひとと討うちと

義と失ひし者小誰か従ひ廉くば。又新公方家も容易も思ひ奉れど。夫小従ふ長岡大館以下の聲守護一奉まば何ぞ當方の不義の弓箭と頼まを給ふべ。人望小背と武門の眞如ふ盡ん事疑ひや。我小不義の名を取せんとも。何事と只管識めらま。喜右衛門は是非あも小谷と出く拍原の詰所小飯。何氣あも体よく居らま。思ひ廻せ。今夜とて實小得。此時節より主人へ。義理がてして得心あも。終る主家の爲あも。止ん。本意あり。同役。淺井掃部と語りて密謀と告ぐ。掃部も至極尤と同心。時刻移。つての悪うべ。早打立んと聞く程。小掃部が良等五百餘人。手毎に得物と提て馳集。成菩提院へ押入。せん。去程にまづ存候と遣。

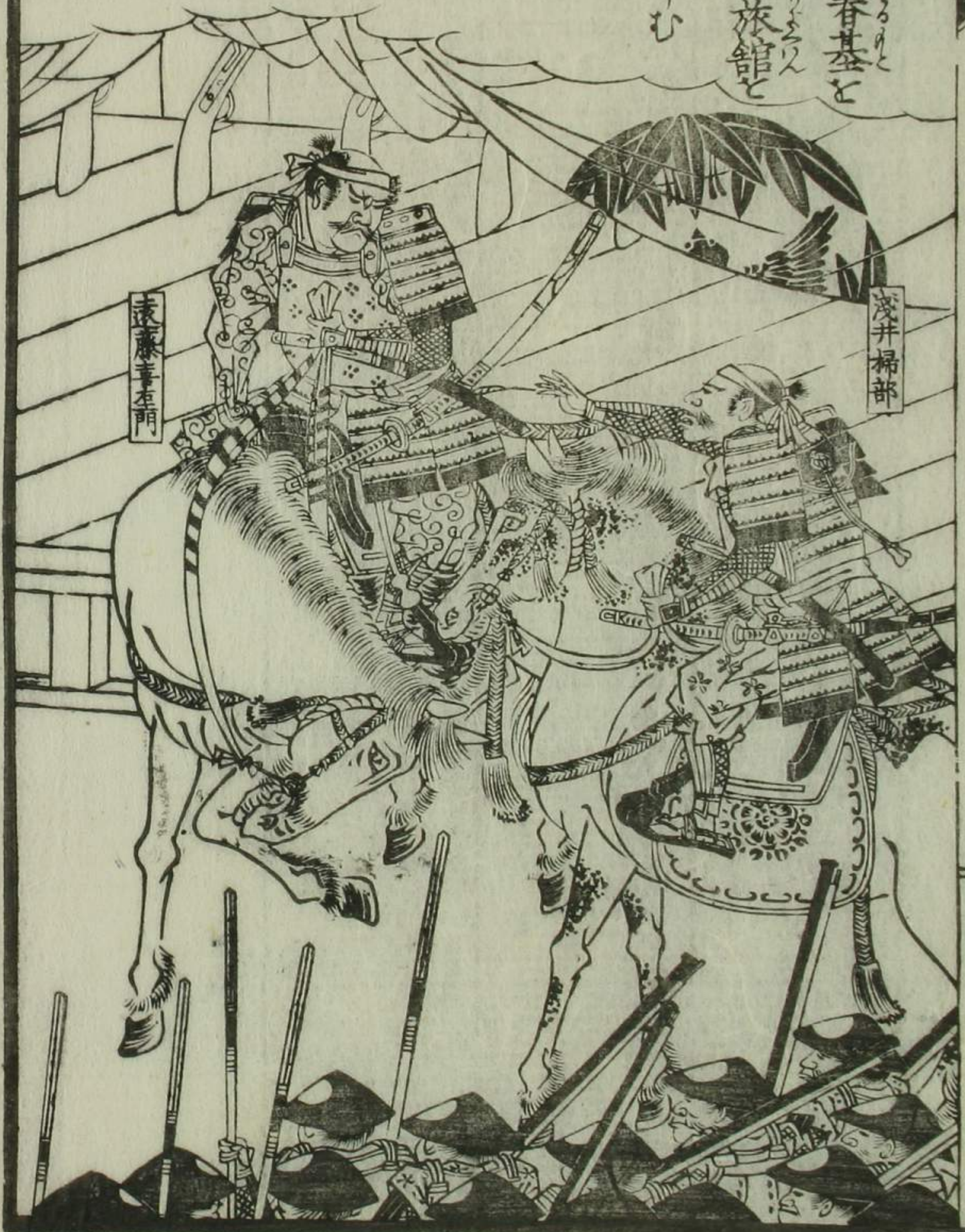
て事の容子と窺へ。士卒兩三人に命じ。其徒ども大息つて。馳つて。何との勢う存せ。ども。數千の兵士成菩提院の表門裏門小門。つと及ぶ。寺の四面小充滿。篝火と焼て守護する体。あも。嚴重小見。候。勿く此計の勢う。押寄らも。更小其詮あ。と注進。と。遠藤打。何条。事の有。夫。正。味方の兵士の馳走。あも。小焼篝あ。我々寄ら。妨げ。様有。速小押寄。やと勵ま。と掃部。と押。否。鹿忽。操出。危。信長の奇異の大將あ。其要害あ。も。非。先足下。獨。趣。實否と見給ふ。の上。左右も計。と。遠藤。と。鎖脱。平服あ。成菩提院。馳行。是。窺。彼。候。告。

信長朝臣
 の旅館成善
 提院江州坂
 田郡柏原小治
 天台宗の佛刹
 なり佐和山あり
 凡四里十二丁許の
 行程なり佐和山の
 今の彦根の一名し



石山軍記功高巻之四

掃部春基と
 止りて旅館と
 窺ひむ



石山軍記功高巻之四

小違々々織田家の兵士四方と固め透間も更ふ見へん喜右衛門大
 小仰天一の備へをいふやと寺中小入んと爲とらんと警固の兵士を
 と詰め夜いまで深し何者あるか案内もく押して通りやと言ふ遠藤
 答へく其の遠藤喜右衛門とて御馳走の役人あるが御饗應の事に付
 て主小尋ぬる子細あるとて小谷(宵のやど)罷まらう只今歸る候ふか
 りと申しよぞ然らば通し泰らせん見知る人や有とら声の下よりい
 りの遠藤殿不相違いと聞ゆると以て借疑ひありとて通しより喜
 右衛門あまり小奇異小思ひ各の何きの手の侍衆とやと問ふ其時兵士
 等一同小是の洲股の城主木下の組の者より蜂須賀某ありて主人
 の制令と字を思ひくは守護せしが今夜の聊かり子細ありと組頭の

下知ふより斯の守護仕り候と應ふ是の木下遠藤が行状小目を
 つも居たり所宵の程より喜右衛門づづ一行し更ふ見へんが數々
 怪しと淺井家の侍小遠藤殿へいふ致さしとやと尋ぬる小委く知ら
 者あり能く探り尋ぬる小遠藤へ只一個馬小鞭うち何方へ馳去りと
 告る者ありふよりとて渠奴が肝を取控さく呉んどと相圖の火とび
 揚るかど小待設る旗下の軍勢蜂須賀稲田堀尾梶田日々野其餘事に
 馴ら兵士等二千餘人摺針嶺の峯々谷々番場醒井柏原より追々に
 馳集り成菩提院の四面と雲霞の如く取圍く錐を立とて地も余る
 拾舞本篇と焼つけ陣列せしと勇々として遠藤の寺中小入て情と
 思ふや大將熟睡して打解しと見ま其臣下小斯らう忠志と竭し

て守護する者あり斯有天より授け良將と吾等とよき分として謀り
々々事の愚さとして頻々感嘆し士卒と走らし。浅井掃部も早々人数
と纏り引くこと遅刻せば過ら有べしと告ぐらん。掃部もこゝを
有下して弓鐵炮の備とくらひ心任ふ軍勢と在所くへ歸り。鬼
角をうらち東天あつても夜いなかのぐと明くらん。信長威喜提院と御立
あつらん。木下が守護の兵士二千餘人前後ふ列して供奉し。信
長の不審と此者どもい何の程うら此所へ参り。誰が指圖めく来り
し。御尋ね有らん。是れ木下藤吉郎がかひて申付し所を候と計り
答へて道とくらめ事故あり。岐阜小歸城まじくらん。

明智光秀初く信長小謁と并秀吉明智が心念と述る

信長本國小歸城へあひく。後藤吉郎を召出さき。江州の始末と御尋
あり。又佐和山小於て遠藤が御酌小立し。時の形勢正しく害心と排む
り。のを見受候ふゆ。御覽の如く執り。又拍原とて。怪し。事の
候ふゆ。組の者と呼し。御旅館と守護仕りせし。候ふと申上り。ら。バ
今小初めぬ事あり。藤吉郎が遠慮の程を頼母し。汝一人隨身せ。如
何なる處小赴く。と氣遣ひあり。とて敷歡び給ひ。斯て信長も
佐々木兼植が心底と悪し。あひ。先是と討滅し。御上洛の道と開き。且
御敵退治の首途軍神の牲儀小祭る。と出陣の用意頗りなり。此時義
昭朝臣信長と召し。明智光秀が事と仰出さ。此者事は。越前小
有し。時旅館へ毎々伺候せし者あり。が歸洛の節。先手小加り。粉骨

碎身多しと申す。既に其期も近づきぬ。遠くは訴へ出ると
有へ。元來當國累代の武士より、明智十兵衛光秀と云る者なり。
苦しくは、何れの手へあつても加へ給ひと仰あつて、信長謹
んで奉り。君の御爲ふ忠と盡さへ。申は、武士の卑賤凡下の差別と言
ひ、招き集りし時節、候ふ上殊ふ上意あり。何と云ふ否申へ。御請
申さるる。茲も亦明智十兵衛光秀の程、朝倉家の祿と辞し、身の
暇をもて越前と退き、美濃岐阜來つ。此所彼處と徘徊し、織田
家の容子と聞合は、當時信長の家老中にて木下藤吉郎といふ
士を、隨へあはし、素姓は尾州愛智郡中村の生れなり。貧しき農民の
子あり。天性智略衆不超と軍慮不賢く、數回希代の忠節と盡せ

小より未だ十年の勤勞と積りて、家老の列に加はり、洲股の城主とあれり。
殊に此度江州に於て、格別の勲功と立ち、由りて、信長の氣入り入
出頭より、雙はは、今年主君織田殿に二十五歳、木下廿三歳あり。事
詳く不聞取らば、然らば先權右の臣に便り、頼まんとて、木下が許し推
参りて、家の系圖を出し、御奉公と願ひ、執成給へ候へと申さふ。藤吉
郎と云ふと、呼はし對面を、其人品言語應對と、さうさう、氣量骨法
よの常不超たり。然れども、其意氣何とあり。穩あつて、召抱ん、好ま
しく、此儘に追飯さんと思ひ、りり、能々沈吟し、此者の爲休吾手
ろく、取持が、究め、某と不快の家老衆に便る。其衆も意地を
合せて、執持し、臆負を、引立ち、余有と、死に却つて、我仇とある

一夫より始終此方小付置く。油断なきや計らうんふあふんと光
 秀と留りて此由言上に及びたり。信長さまを聞し召さまを此程新公
 家の御口入あり者なり。早く召連来りて宣ふより藤吉郎まで
 了て怪しき者ある能も我手より申出り外々より推舉したるん
 ろい如何なる計策と企んも量ぐく心は思惟し直小光秀と伴ひ
 登城しるる信長對面のうへ其方の代々當國の住人ありあまは我れ
 疎く思ふは且越前小於て新公方家小忠志と盡せし事尤以て神妙
 なる今般御歸洛ふつと御先鋒小参し忠戦とす候々一廣の恩
 賞申行ふ祖先の家と興し末代の後榮と開くごこと此度の忠に
 所なりと仰渡されたるも光秀平伏し身不肖ふりとも天下の御大事

又馳加て忠功と盡し候らん事原来の本望ゆ候ふ某當國と流浪仕
 諸國と遍歴しりて今も余せる青雲もあく空く星霜を送り候ふ
 内々々越前小住居仕り此の功と以て莫大の恩を受けて候ふも彼國風
 ろく大將も諸將も我國廣しとありの古参新参を隔て忠勤と盡せ
 べき義と存じ且新公方家の御顔とを黙牛の事偏小恐入奉るより御
 跡と慕ひ早々出國仕り候ふ言上せらる。信長元より不快ある朝倉
 の浪人と聞て義景が充行し祿小肩ごさあわひども既小出陣の日も迫れ
 俸祿の沙汰い置ま早く先鋒小着て江州へ討入働さく但一他國の
 軍小幾度出令ごやと尋ひあひ光秀今まぐ得り風雲天氣の術と申
 出りより信長も耳新く聞あひる善軍師と得たりと悦び

光秀木下
の第宅を
訪うと推
舉と托ひ



光秀

給へ御前勤仕の面々も齋しく光秀が辨舌も欺る是と難ざる力みえの
 希代の名士と得あつと一統感ざるのそあるは木下思ふ故あまも是を
 述るの暇もれ信長渠を用ひ給ひ先鋒の大將さん事を許されり
 願ふも又爲ともあつた暫く扣く詞を出さ
 其翌日木下藤吉郎一人出仕して御前罷出るの度召抱へらる明智光
 秀の器量骨法凡者あつた其心驕る謙退辞讓の禮と思ふ
 其上叛逆の相面ふ顔も後々の御爲ふ宜しく尤諸國を遍歴
 何方あつても奉公ふ在就る正しく何事の大將も渠と嫌ふが
 故あつて君の處と御賢慮あつて退け給へん事を願ふと言上
 るは信長聞食彼が事累代當國の任人あつて我舅齋藤山城入道

道三小忠義と盡く者あつて其由緒あるのあつた此度新公方家の御
 口入あつて廉もある旁く以て止と得る是と親しくせらる事々心
 得るも退んとい爲る諸亦今度の出陣に義兵の擧ぐやうそ
 一人あつても然るつて武士とて擧用せらる時節なり光秀も勇士を
 出陣の期に臨んで得る事先以て吉兆とりあつて後格別此度の事
 は信長の儘も爲る新公方家の思召もあつた何ふも先陣小加
 つて働をせし何故か後患あつた申ぞやと尋ねあつた木下
 の曰くたつて光秀の主と賣の賊あり夫君の臣と扶助する永く其
 家小も君臣無究の榮へと爲んがためなり朝倉義景五千貫とよす
 重く用ひ家老の列小加の是渠と知て愛するが故小候りや昔

晋の豫讓の士を己と知者の爲に死せしむるに然るが光秀一命と抛
て已と知るの恩と報ぐん一粒とも恩禄を受ぶる新公方家の爲に
志と傾け義景が恩み返さく他國に來る事の始終己が身の爲あり
是不忠の臣と号せん又不義の賊と唱ふべし我君近々三好と誅戮
將軍と守護し給ひ威名四海に震ふべし義景身の愚昧とい言な
ぐ新公方家と一乘が谷に置奉る寒暑と訪ひ佳節と祝ひ年と重
給との給仕饗應其費幾許ぞや將功と立ち臨み大功と他國に
奪るも何れも心は口惜り多く其臣たる者少く忠心の腸あふ
徒に誰れ憤りと懐くぞん賢愚人の性質あり義景愚みて果は
とつ共光秀と用ゆる事の用ひら然る時の幾回も諷諫して義兵を

を命と捨て諫むるを忠なり。さなだして今般の次第是即主
反くにわづら其根えい己分外の昇進と望むる起きり往昔より
今に至るまで過分の立身と心とをる者い常不足の心絶を後主
と計る者小候を憚る所あり言をよて信長莞示と打笑めい汝が言は
條理不當も余あれど諺に千里の名馬も伯樂に遇ぶん空しく鹽
車に用ひらるるといふも明智が如き千里の名馬義景とれと使ふべし
才機あきか故彼を去る此に來る信長に從ひあひ以來背く事能
汝強て惡し事ありて諫と用ひ給ひら藤吉郎が爲方ありて
退出しつらる果て後年君と弒し奉る事木下言の違ひあり
一説に信長木下が諫言より疎忽し光秀と抱へぬ刺へ先鋒に變

事と悔しめども別不然せる手段あり如何いせんと思召さる事
柴田勝家佐久間信盛等も意見と尋ひ給ひしころも兩人は平生木
下と不快ありあり藤吉郎の威勢の衰へん事と計りて頗る推
舉り木下と争りゆ終るに木下と明智と相闘りあるを究めと
木下の誤り出来を是他手と借て木下と斃を最上の謀略と
思ひ程ふ一入ふ骨折る明智と執成りたるあり信長も老臣等
の詞小就て先此まに召使るるも不定まら木下御前ふ
出し時信長宣ふや諸老臣一同新公方家の仰も捨がごとく
其修ふ此度の先陣を免し置と然るべしと申あり豫て定め如
くありつる也と有るるも木下兼り斯まで殿の思し召あり愚臣強ち

小拒し申しとて言語少るも退出し再回諫るても爲ざりし也
信長義兵岐阜と進發を并箕作和田内の落去刻限を決む
斯く織田上総介平信長は江州を打破り新公方家御歸洛の路次を開
えんとて美濃尾張參河北伊勢の軍兵を催促し三万八千余騎の着
到披見のうへ永禄十一年九月七日出陣と觸渡さる其日立政寺ふ衆
上ありて義昭朝臣の御氣色と伺はる今日先御敵退治のさるも出陣
仕る所候ふ不日逆徒と討平け速うも御迎と奉るべし其時早く
御出馬あるべし候ふと言上ありしころも義昭朝臣とて近習伺候
の面々飛立如き思ひを最頼母しく思はるる頃て濃州岐阜と
雷發し近江国不趣給ひ隨遂の武士も佐久間右衛門尉信盛柴

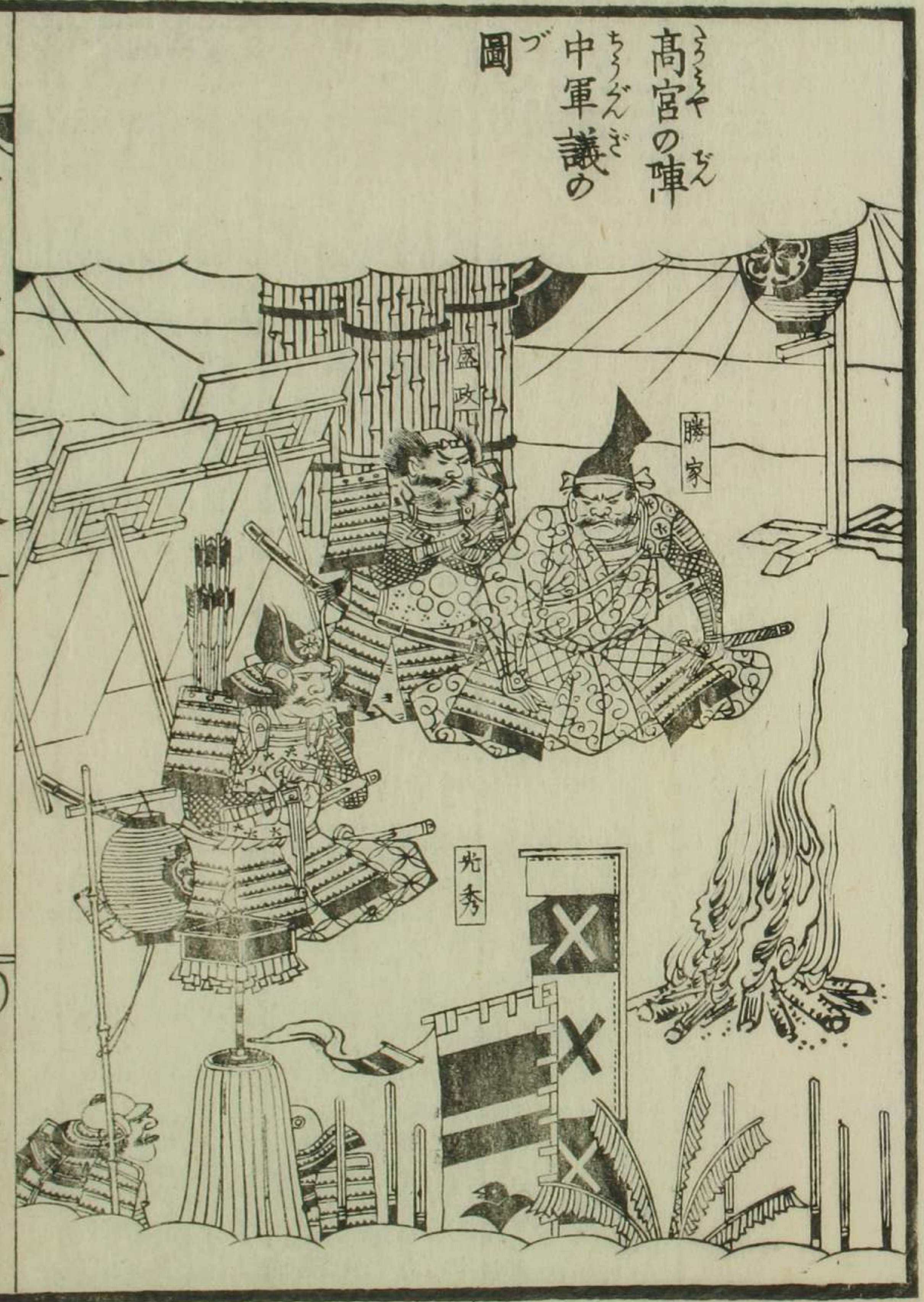
田権六勝家丹羽五郎左衛門尉長秀木下藤吉郎秀吉池田勝三郎
 信輝信輝縮兼伊豫守伊賀伊賀守森三左衛門坂井右近將監蜂屋兵庫
 頭前田孫四郎佐々内藏助福富平左衛門林佐渡守毛利新左衛門同
 河内守菅谷九右衛門野々村三十郎水野帶刀梶川平左衛門飯尾近江
 守同隱岐守堀久太郎村井長門守瀧川左近將監長谷川与次郎和田新
 中嶋豊後守飯沼勘平不破河内守同彦三郎山田三左衛門丸毛
 兵庫頭同三郎兵衛丹羽源六一族々兵衛丹羽源六一族々舍弟織田上野々同源五郎同彦
 七郎宗徒の勇士一万余騎都合其勢四万八千余騎先陣江州柏原
 小着小着後陣後陣濃州の垂井赤坂小支小支去程去程數千の
 赤旗諸軍の指物秋風小翻赤旗諸軍の指物秋風小翻唯是吉野初瀬の春龍田高雄の秋と

疑疑其形粧宛も周武牧野不競疑其形粧宛も周武牧野不競高祖函谷小望高祖函谷小望形勢も斯やと
 思思勇々勇々粧粧大將其夜大將其夜成菩提院成菩提院一宿一宿く
 翌る八月小江州犬上郡依和山の城小着給翌る八月小江州犬上郡依和山の城小着給浅井長政此處浅井長政此處まぐ出
 迎迎江南城々の手配江南城々の手配種々相談種々相談あゝあゝ爰爰兩日滞留兩日滞留あつて人馬の
 息息と休と休あゝあゝ同十日依和山同十日依和山より出張より出張高宮の庄小陣高宮の庄小陣とと其傍
 辺辺と放火と放火味方の軍威味方の軍威と示と示敵方の容子敵方の容子と計と計あゝあゝ佐々木方に
 も豫も豫期期しる事しる事あゝあゝ更更油断油断の景色の景色あゝあゝ箕作山和田山の兩
 城城と堅固と堅固小守り容易小守り容易うう打打く出く出るるとと路傍路傍の小城の小城あり其
 儘儘ににまま小非小非ど是ど是と攻と攻んん何何とと先先とせんとせんと其夜と其夜ハハ愛智川愛智川小
 陣陣と取と取らら軍の評議軍の評議ありありああ大將信長大將信長宣宣ふふやや箕作山和田山觀

音寺と三の城づきも鼎の足のどく並ぶ立られども観音寺に根本
 あり外の二城の枝城あり本城と落しあひ枝の自り崩れしと仰る
 小柴田勝家より隨ひ本と絶て未と枯らるの譬ありて殿の仰せ所理あり
 と答ふ木下藤吉郎謹んで是れ恐るる然るに箕作山和田山を
 味方の御陣近く尤も観音寺繫糸の城より鼎の相救ふ意を以
 て築立し所ありふ此二城と捨く夫より奥の観音寺へ取り候ふ軍
 事難儀ありん時後ある二城より後詰ふわいあるが幾ど迷惑不及ふ
 言上る小柴田の強て本城観音寺山と攻んとし木下其城の要
 害は是ましく度々参りて案内の能覚へめまは容易に攻落し其
 攻安き箕作和田山と乗取んと議論あり上秀吉和田山と僅ふ三

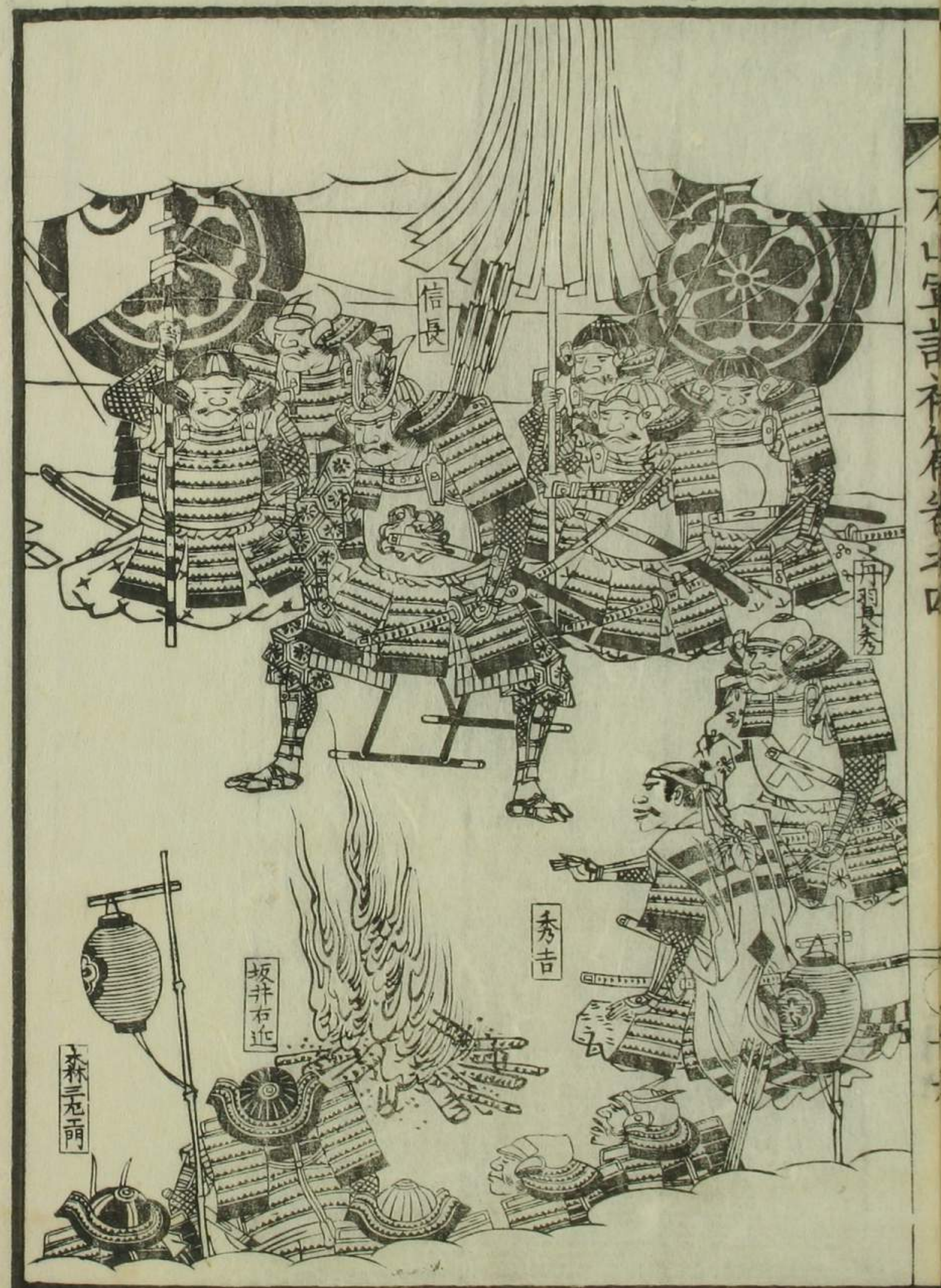
時の間も攻落し夫より箕作と時と延ぶ攻落さんと答ふ柴田中
 小兩城と木下入ふ落せんも快く是れ明智光秀不向くせ我輩も
 加勢とあり渠も功と立させ木下が威と減んと思ひて箕作の明
 智光秀不命せしは執成る是ふらく信長の仰しと坂井右近
 森三左衛門兩人ふ一千餘騎と差添く明智と見継し且柴田佐久間
 も加勢とあり軍勢許多ありしも皆故叅の歴くあまは万端あり自
 分の心は任せども腹心の者として従弟の明智弥平次光春同光忠郎等
 ろの三宅藤三郎奥田久右衛門此輩のめく其餘の者として此度預
 らまし五百余人の足輕なり也とわがも老臣達の艱負厚く此合
 戦も抜群の功と立んと勇進んで用意とあり箕作も三時を限り

高宮の陣
中軍議の
圖



高宮の陣

二十



高宮の陣

二十

責落さんと數軍慮を廻りたる柴田佐久間ハ秀吉ふかぬを取ん
とユミヨウ程ハ其出陣の時刻と双方ハハ寅の刻と定め己の刻を限り
尤片時も早く落セ一方と第一の勲功とを争ふことなり

江源佐々木諸城を固し并箕作和田山の両城没落

佐々木六角彈正少弼義賢入道兼禎同右衛門督義弼ハ逆臣三好ハ
合體シ今般信長が上洛と支んと國中の要害十八ヶ所ハ若を構
就中箕作和田山當本城の觀音寺山より鼎の足の勢ハをみ敵
と微塵ハ切平さんと手配頗る嚴重なり先箕作山の城ハ吉田出雲
守と大將ハ三千餘騎と籠と和田山の要害ハ山中山城守田
中治部大輔兩人ハ三千余人と附て守らせ日野の城ハ蒲生下野守

貞秀同嫡子右京大夫賢秀ハ八百餘騎あり楯籠る守山の城と種村
大藏大輔上坂主馬助一千餘騎ありと守り水口の城ハ進藤山城守
建部采女正一千五百人ハ籠城を石部の城ハ伊庭出羽守里見内藏助
一千余人を籠らせ草津の砦ハ馬淵治部大輔同藤五郎七百余人を
入と長光寺の砦ハ上坂兵庫助後藤傳八郎一千餘人と籠と其餘
永原楯崎の徒ハ面々の居城ハ楯籠と西近江ハ宇佐山堅田高嶋の
城々ハ佐々木六角旗下の諸將等楯籠と無双の湖水と中ハ一騎
當千の勇士幾千萬とハ數とハ要害ハ是と守り如何ある
大軍ハも恐ろふ足どと肘とハ氣と張て待りけり儲亦織田の
寄手ハ先本城の押ハ旗本と以て觀音寺口を取切せぬ木

下藤吉郎の宵の程より兼て奇計と廻らし置き寅の刻より成り頃
 明智と一同本陣と押出し左右別と和田山箕作山へ攻寄る木下
 ら例の加治田隼人稲田大炊小下知して此傍辺の野武士と口集め山を
 の案内者五百餘人を従りせ此者共謀畧と授け青山新七同小助
 長江半之丞河口久助堀尾茂助ホと大將として和田山の後小前夜より
 埋伏せ大手の鯨波の聲と相圖ふ如此々々せしと教へて扱大手
 手勢三千余人淺野弥兵衛中村弥助木下小一郎大澤主水蜂須
 賀小六同又十郎等と引卒し宵より謀と以て敵と欺き十分に
 退屈の氣と見せし。大手搦手より攻寄つて後の山より火筋を放
 らし役所と焼く終ふ城と責落し大將山中田中の兩人小降参

を残り兵士を悉く助け速に城と請取り降参の兩將と召具し本陣
 入りし時未だ辰の上尅る。且味方小手負とて十分の勝利
 ありしと第一の勲功とを感ぜし。木下即ち山中田中と大將の
 前小引出し見参の式と取繕ひし。神妙の事と宜ひ木下次弟ら
 べしと仰出さし。田中治部大輔吉政へ木下の組下とは山中山城守
 長俊へ観音寺の本城小歸し。佐々木家と和議と取あつて。論し
 遣ぬ明智十兵衛光秀へ木下同時本陣と進發し箕作山の城小向ひ
 禁小陣し。城責の工夫とあり。夜明より。都合ありと東雲を
 待て攻より。坂井右近森三左衛門の兩人。元来明智の指揮より
 て戦ひ柴田佐久間の老臣。先陣小進む。長氣ありと光秀と俱り

麓不在と備へり光秀軍慮不油断あり追つて一の戦ひも然れども
 未だ落城不及ぐ藤吉郎御前不有て織田どの申を申す箕作山の
 等閑の城地不非と落去延引せむ他々の城將亦加勢とありて妨げ有へ
 愚臣も是より加勢仕ぐりて手勢五百人と引るも明智が
 陣不至る不光秀これを見て大不あせり貴辺より和田山と落しぬ
 あやと問秀吉答へて候ふ既不和田山と抜て候ふが當城ハ要害
 一入超まれば和田山と同日の論ふあはれ本陣あり吉左右待申さん
 待遠く候ふゆ御見舞不参りて時限の事不強て御心配あるま
 始終の勝て專一なりと召連るる五百余人の手勢と借与へる
 が木下奇計の良將とらふ事不馴る蜂須賀稻田梶田の勇士ホ城

兵の混雜不紛入散る不切立く五色の指物と塀の上不振閃り内
 城門と閉り被木下が借与へる五百余人面もあはれ一番乗をと呼
 び入る明智方の森林坂井も俱不進んで乱入せ程不城兵
 く仰天し大將吉田出雲守防戦する事能く終不降参りて士
 卒の命と免しあへ願ふ程不光秀本陣不達し信長の許しと受け士
 卒と助け城將と観音寺の本城へ引るを既不箕作落去とて
 時いふや己の刻不過ぐ其上木下の組の者一番乗せしと以て光秀殆
 快くは実も木下が手と中と働く如何も不思議の軍慮うなと吉
 と巻て恐まき然れども首尾なく城と落せしと面目なく諸勢
 と纏めて本陣不至り斯と言上に及び信長悦喜斜め堅固

の両城と手始め小時と移るに攻取し事因運の瑞相ありと勇まひ
木下明智の勤勞と賞美しあひたる斯有し程小柴田佐又間も木下
が働ごとと感し其後の偏執の心も聊薄やとる

觀音寺山落城并前田が智辨蒲生と伏を

信長初度の合戦不佐々木家の要害弟とせし箕作山和田山の兩
城と暫時の間小攻落せし勢ひ恰も破竹の如く九月十二日午の刻
のさめあまは是より何きの城小發向とてとやと評定ありとる小
諸將等も觀音寺の本城小取うらせ給ふと答ふる者多かり
うとも木下藤吉郎ひかり是と止め使者と以て利害と説せあつ兼
積必らと降伏仕るべしと申さふより即時小軍使と馳て味方の諸

士と休息せしめ頼と使節と仕立と觀音寺の城小遣りて兼積父
子へ申さまはるる新公方義昭君濃州へ御動座ましく逆臣三好と御
征伐あつと爲信長御先仕るる吉仰出ささけりあより美濃尾張の
軍勢と催促し是ましく發向小及び候ふ六角家の京都將軍小於て一方
あつと賞配りし小家系ある小度くの御頼とを黙止し逆臣小一味を
る事近頃以て不義の至る小存ぞ然まども新公方家の御旗と望
見ば速に陣頭小泰上り前兆と悔申さるる所の所其儀ありは依
て箕作和田山と攻落し候ふ條弓箭の道止と得ば此上へ夫へ押寄
申さるるまとも累代富國の守護として久しく武恩と蒙るあひあつ
一旦の意地小引き不義と以て先祖の忠功小思召替らると思免の御

沙汰あるごとく様申あそく候の間々々城を開き台駕と迎奉
 つるべし若又猶も前非と悔みの心あり御敵と成らば候ふは於て
 即日お押しせし戦の下に武威と逞しく成らばなり但し我等は義
 兵なり義兵お敵なる徒に逆賊與力の不義の兵士なり天道の義
 尚ふ誰の不義おとらば人道の君臣と本は誰の君と弑せし三
 好小従ふこと數代相續の名家不義お與し不忠小従ひこひ失
 んと歎くこと至らば能々思案と廻り返答お及むべしと
 有る外お木下藤吉郎より別小使と添く年来入魂せしと
 ろまの如何ありて佐々木の家の長久あらんことを祈る由とせし
 観音寺より兼禎父子とせしめ諸士大將箕作山和田山と一

日もあらんば落城せしと全く織田家の武勇のそふ非は天道の助
 くる所人らそふ従ふの所理ありと漸思ひあはる折々斯る使
 者の来りて利害と説示せしむるに流石お麓忽の會釋もはげ
 最叮嚀おりてあつ何分此方より即刻御返答申べしと先使者を
 之より後兼禎の曰く當城は累代の居所なり此所お敵と引請ん事
 末代まづの耻辱なり又降参せんとも今更お面目あり一先此城を
 去り敵お一花りせし鏡氣と受け又爲方も有べしと評定一決して
 取ものも取あらんば手廻りの調度若干面々手おく携つて數年住
 ろまは城中と餘波おくも上下よりお命おしる譯もあの上と下
 と持へし観音寺坂と下立ち女性を志す悲しめい誰れとて呼

信長観音寺
山入城の圖

観音寺の城は江州神崎
郡あり木街道清水
鼻の老の山上あり
頗る要害無双の城
廓あり佐々木家の
先祖判官時信の
居城ありて今義
興く九代相傳
二百五十年に及び
落去とる事
惜し



不聲ぐ餘あまも分ぶんも定さだりあり後のちに聞き得えと答こたへる人もあり。実まことは一年平
 家けの人々都みやこを落おちるせぬ形勢かたちも斯かくやと知らまじく哀あはれなり信長
 使者しやの返辞へんじもてあり振びと聞きし召めい余おのれ有あべしと仰おほせらるゝと藤吉郎側
 より明日あしたの殿とのの御座おんざと観音寺城くわんおんじのしろへ移うつり奉たまはるゝ候まじふ景禎しやうてん是
 より御返辞おんへんじ申まをべしとい心静こころしずみ退城たいじやうつらまらんとい心こころを候まじふ本城ほんじやう落去
 候まじへし属城しよくじやうの手段しゆんけん入いるゝ然しからば十日じふにちの内うちへ御上洛ごじやうらくありと
 あり候まじふと言い上ありまはる信長しんぢやうも嬉うれし氣けふ見みへぬ去程さけ不ふ望
 十三日じふさんじつの曉あけがあり候まじふ使者しや番ばんより飯いり観音寺くわんおんじの城しろより夜中よちゆう小大勢退
 出いせ故能ゆゑにく相窺あひぞろひ候まじへし景禎しやうてん父子ふしとててめ女性おんな幼稚ちゆういの者もの資負しやうぢ敗
 雑具ざつぐと持運もちゐび我先われましと落失おちま候まじふと注進しゆしんしるまはる信長しんぢやう藤吉郎ふぢやうぢやうが

中なかつせし詞ことば符合あせしと喜よろこび給たまひし先ま彼城かじやう入いり手配てはらりと為なる
 總軍そうぐんと引卒ひきぞろし先ま観音寺山くわんおんじのやまの城中じやうちゆうの虚安きよあんと巡見めぐりみし頗おほく入城いりぢやう給
 ひ又またも軍議ぐんぎと定さだめし先ま眼前まへの敵たかありと守山もりやまの城しろへ木下藤吉郎きのしたふぢやうぢやう
 池田勝三郎いけだかつさんぢやう信輝しんき。兩人ふたりも五千余騎ごせんよかりとて漆うるしらき日野ひのの城しろへ紫田むらた権六けんろく勝
 家け佐々内藏ささうちざう介成政すけまさ蜂屋はちや兵庫頭ひんがうぢゆう頼隆たのりゆう三人さんにんと大将たいしやうとて其勢そのせい一万余騎いちまんよかりと
 従したがひて則すなはち十三日じふさんじつ巳刻しごくおのく仰おほせらるゝ観音寺くわんおんじを發はなし守山もりやま日野ひのの兩城りゆうじやう
 へ二手ふたてふ別わかきく押寄おしより。木下藤吉郎きのしたふぢやうぢやうへ智畧ちりやく衆しゆふ起おこるまはる守山もりやまの城しろ
 主種村大藏しゆしゆむらたざう大輔たいほへ計策けいさくとて堀尾ほりお茂助もすけ吉暗きちあんふ言い合あめ使者しや不遣つらし。
 智年ちねんと振び種村しゆしゆむらたふ怒おこり起おこる。其夜そのよ敵兵たかへいの夜討よちうふ来きるまはる様やう
 ありし。種村しゆしゆむらた此謀略このしやうりやく不墮おち入いる。夜討よちうふ来きり終つひみ池田いけだ信輝しんきの為ため

小種村大藏討死し。上阪主馬助ハ逃去る。行方未定に軍兵残らば
 落失く忽ち落城し。凱歌をあげ本陣へ斯と注進あり。信
 長悦喜限りあり。木下池田が働きと感賞あり。偕又日野ハ柴田佐々
 蜂谷の三将一万余騎みて。短兵急み責む。城將蒲生ハ名小高
 世に聞へる勇将めて寄手志む。敗軍に死を蒙る者多し。容易
 落去とくとも見へざり。木下藤吉郎謀畧と言上げ。神戸藏
 人具盛前田孫四郎の兩人と使者とあり。天道順逆の所理と述る種
 々と諭し。蒲生下野入道快幹同嫡子右兵衛大夫賢秀もろと
 も始りて夢の醒る如き思ひとあり。怒り信長の處分に従ひ賢
 秀其子鶴千代今年十三歳と伴ひ観音寺へ来り。信長大悦む。

本丸に迎へて對面あり。速新公方家の御説み従ふ候と
 さうと悦むせ給らん。信長も於て大慶。過ぐと懇み
 宜ひ。其上鶴千代の器量世に勝まると褒美あり。信長の息女
 今年十二歳の婿とあり。給ふ由と契約あり。且鶴千代と忠三郎と改
 名とす。昔仰含め。是ハ彈正忠の一字と分され。意ありと宣
 ひ。賢秀只管心中に悦び。聞し増る大將。ふのぞく。此人
 の為小に心あり。忠勤を勵み大功と立あんと思ひ。忠三郎ハ
 後年参
 謀徒四位下飛彈守藤原氏卿と
 言。奥州會津百六万石を領す。又前田の智辨みよつ。蒲生と味方あり。世
 ハ大勲功と賞ま。是より後孫四郎と改め。又左工門と号る。仰
 らまはとあん

繪本石山軍記初篇卷之四終

新編言林類聚卷之四

八尾地藏通夜物語

全五冊

此書ハ藪醫一樂子産医たらんを欲し八尾子至り地藏堂ニ通夜せし更
闌て餓鬼共地獄乃非と訴たる事より尊像この一樂子ニ教化して或ハ瘡と落
し或ハ産を守り或ハ火防ならん世俗の惑と解諭し君臣父子夫婦長幼乃理
を正し勸懲と主とし其説八宗ニ亘りて灑落よもしらくわりの如童婦女
も了解し易き書なり

中山観音夢物語

全五冊

一名八尾地藏通夜物語後編

此編八尾通夜物語乃續編より渠一樂子り地藏と恨むと観音夢中ニ説諭し給ふ
因果因縁の事より今世現在の迷と解と實ニ面白く必讀益を得る此書なり

